

(資料3)

「地域学を通じた環境教育・E S D」

—学校と博物館の連携による教育の創造—
—地域を利用した学習「みうら学」の創造—

五島 政一 (国立教育政策研究所)

【概要】

私は中学校の教師時代「子どもが生き生きと理科を学習し、理科を好きになる教育」をめざして実践活動を行ってきました。この過程で、子供たちが生き生きとした学習を展開すると、理科という教科の枠組みを超えて、総合的な学習・探究的な学習に発展することが分かりました。また、ほとんどの子供は自然が好きで、野外学習の間にいろいろなことを発見していることも分かりました。その発見の多くは専門家も知らないことが多く、探究的な学習に適したものです。子供たちは、その発見の合理的な解釈を求めます。そのため、必然的に専門家の助言や指導が必要となり、学習の場も学校外の施設（博物館など）を積極的に利用するようになります。このとき、有効な情報を与えることが出来れば、彼らは探求的な学習を展開し、ますます自然への興味関心を深め、主体的に学習する方法を身につけていきます。

教師は、子どもが生き生きと主体的に学習する指導するために、他教科の教師と協働してクロスカリキュラムや総合的な学習を組織したり、博物館などの専門家と協力して指導する必要にせまられます。つまり教科間のネットワークや学校と社会施設とのネットワークが模索されはじめるのです。そのネットワークがうまく機能するためには、教師は他教科の教師や博物館の専門家から援助や指導を受けるだけでなく、自らがボランティアとして貢献すること、つまり健全な Give and Take の関係が必要になります。教師は、教科を指導する teacher としの役割だけでなく、探究的な学習を支援する Facilitator の役割、他教科や他機関と連携・調整する Coordinator の役割、ボランティア的なアマチュア Specialist の役割などが求められることになります。それらの過程で、教師自身が自ら学ぶ姿勢を子どもに示すことができ、受験のための勉強でなく、学ぶ楽しさを後ろ姿で示すことになります。

地域の身近な自然を利用した探究的な学習（フィールドワーク）を長い間展開することで、いろいろな標本や地域の自然についての研究成果が蓄積され、それらを理科室に展示することで理科室を地域のミニ博物館にすることができます。そこでは教師はミニ学芸員であり、子どもは地域の自然史や社会・文化を研究する事を通じて、地域の文化創造に貢献することになります。学校が受験教育だけの場ではなく、子供達の主体的な学習の場となり、地域の文化作りや文化発信の場となります。21世紀の（理科）教育では、地域から知識や文化など生みだし、それらの発信や交流を通じて学ぶ楽しさを体験できるような教育システムが求められると思います。

以下にこの概要を詳しく説明します。

【上のように考えるようになった過程】

まず、私が博物館・科学館などの社会施設を利用した学習を展開するようになった過程を説明します。

(1) 自然体験は好きだが、勉強はつまらないもの

私は、神奈川県の上浦半島で育った。そこには田んぼや雑木林があり、カエルやアメリカザリガニ、カブトムシやクワガタを取り、朝から晩まで外で遊んだ。子どもはガキ大将集団で良い事も悪い事、いろいろな体験を積み、生きる知恵を学んだ。私は、学校の勉強には全然興味を持たなかったし、できなかった。

(2) 学問・学ぶことは、本来楽しいもの(知的好奇心、学ぶ楽しさ)

高校のとき、英語を教える笠井健男先生と出会った。英語について、質問すると、答えだけでなく、答えの理由やその質問に関連する興味ある話を詳しくしてくれた。英語について質問すると、「その質問に答えるためには……、フランス語やドイツ語の知識がないと説明できないよ。そしてそれらの言語を本当に理解するにはラテン語やギリシャ語を勉強しないとわからないのさ。……疑問を解決するために、最後にオックスフォードイングリッシュデュクシヨナリーを引くと unknown と書いてあった。僕はここまでしか知らないから後は自分で勉強するしかないよ」というように、一つの質問からいろいろな世界が広がって、学問の深さと面白さを感じた。私は、「この先生は本当に勉強(学問がといったほうが適切かもしれない)が好きなんだ」と思った。初めて、学問の好きな先生にであった。その先生の学ぶ姿勢を見て「先生というのも、いい職業だな。自分の学んできたことや、学問の楽しさ、学問に対するロマンを語れるっていいな。」と思い、教師という職業が将来の職業の候補の一つになった。笠井先生は、昔、大学で教えていたこともあったので、大学教授はみんな、このような幅広い知識と教養をもっていて、学問を楽しんでいて、一つの質問に対して、深い知識と教養で答えてくれるのだろうと大学教育にひそかに期待した。でも、実際大学に行ってみて、大学の先生に質問すると、笠井先生のような先生は少なく、知識はあるが、「この人は学問が本当に好きなんだ」とは思えなかった。大学の授業の多くは面白くなく、テストも周期的にパターンは決まっているので、本気で勉強しなくてもよい成績は取れた。しかし、石川孝夫先生の「物理特講 I (講義実験)」と国分康孝先生の「人間関係」と阿部友三郎先生の「泡(地球物理学)」の授業は、出席するのが楽しかった。これらの先生の授業から、その先生方の生き方(人生観)や日常生活と学問との関連がみえ、親しみももてた。学んでいる知識がどのように生活に生かされるのか、具体的に分かった。そして、知識を教えるだけでなく、生きる知恵が含まれている授業と思った。

(3) よくわかる、できるようになる理科教育の追求と限界

私は、中学校まで勉強ができないで授業がつまらなかつたという経験をもっていたので、中学校教師になって数年間、「まず、その教科ができるようになれば、好きになる(楽しくなる)。」と考え、うまくわかりやすく教えることを研究した。わかりやすい授業で熱心に個別指導したので、生徒は「理科が面白い」とか「理科がわかりやすい」とか言われ、生徒の成績は良くなった。でも、その教育方法は教師中心の(教師が主役となる)指導であり、「先生が変わると、教え方が変わる(面白くなくなる)と嫌いになる。」という限界があった。ある英語の先生が受験勉強のために、毎回単語テストを熱心にやっていた。教師の熱心な指導で生徒は統一テストの成績も上がったと思う。でも、高校に受かったら、英語を好んで勉強する生徒は育っていなかった。受験のためだけの勉強で、学ぶ楽しさを教えた(本当の意味で育てた)ことにはなっていない。私の恩師笠井先生の英語の授業は、もちろん受験にも対応していたが、学問の楽しさや厳しさなどの雰囲気があり、それは私の人生にもっとも影響を与えたものであった。生徒が自分で探究したり、学ぶ楽しさ・厳しさを体験できる指導をして、生

徒が自分で学習を展開するような能力を育てなければ、本当の意味で生徒を育てたことにならないと考えた。そして、教師が主役で「生徒が教師の説明をよくわかる」という生徒が受け身で学ぶ授業から、生徒が主体的に生き生き（能動的に）と探究的に学ぶ授業へと私の指導方法も変化していった。

（４） 子どもが生き生きと意欲的に主体的に学習する理科教育の構築

教師生活 16 年の中で、常に「生徒が生き生き意欲的に学習する理科教育」を目指して研究してきた。生徒が、自然や理科に興味を深め、学校教育終了後も、自然を愛し、科学的な見方・考え方を持ち続けられるようにするには、何をどのように教えればよいのか、16 年間試行錯誤を繰り返してきた。その中で、実物を使って実際に体験するような学習は、学んだことを文脈で記憶しているので忘れにくく知識が定着するだけでなく、生徒が自然や理科に興味・関心を示し、卒業後も良い影響を与えることが分かった。私が目指した理科教育を行うには、直接体験をできるだけ多く入れることが大切であるという結論に達し、実物実体験による理科教育の構築に励んできた。

実物には、五感を使ったいろいろなアプローチの学習が可能であり、五感を使って直接体験できるので記憶に残りやすいという利点がある。例えば、絵に描いた「鳥」からは静的な視覚情報しか得られないが、実物の「鳥」からは色々なレベルの視覚情報の他に、臭いはどうか、さわってみての感触はどうか、鳴き声はどうか、など様々な情報を得ることができる。また、鳥を直接観察した体験の記憶はそう簡単に消えるものではない。実物を使うと、多様な生徒の能力に応じた多様な指導が可能になる。

実物を利用した実体験の学習にはいろいろな学習が考えられる。例えば、理科室での実験、教室で本物を使っての学習、物づくりなどもその中に入る。しかし、理科学習とは自然に関する学習が中心となるので、地域の身近な自然(実物)を利用して野外で学習(実体験)することが、一番大切なことである。生徒が直接体験を通して自然を学ぶことで、自然の美しさや不思議さに感動したり、自然に対する愛着や畏敬の念、そして郷土愛なども育むことができることもわかった。だから地域の自然を利用した実物実体験は、自然を科学的に理解するだけでなく、豊かな人間性の形成にもつながることになるであろう。それに、ほとんどの生徒は自然が好きであり、自然の中に入ると生き生き活動する。生徒が地域の自然で発見する事や不思議に思う疑問の多くは、専門家も答えたり説明できない未解決なことである（残念ながら、これが野外学習が普及しない原因の一つでもある）。生徒が教師の知っている知識を Top-Down 的に教わるよりも、まだ解明されていないことを教師とともに解き明かしたり、探究したりする体験の方が、面白いと思うのは当然のことである。私が、専門家と中学生と一緒にフィールドワークをして化石採集を行ったとき、その地層から初めて発見された巨大鮫の 10 cm の歯の化石を発見したのは、地質学について知識を持っていない中学 1 年生の生徒であった。その化石は平塚市博物館に常設展示されている。そのような体験は一生忘れないだけでなく、子どもに自信を与えるものである。このような知識の量を超えた意外性（大発見）がフィールドワークの中にはたくさん隠されている。だから、地域の自然を利用した学習は、生徒が探究的な学習や問題解決的な学習を生き生きと展開するのに適している。このような理由から、地域の自然を利用した直接体験(実物実体験)を重視した理科カリキュラムは、理科学習の中心になるべきであると考えられる。

（５） 一人の教師の限界とチームワーク（他者との協力）(学校外の施設の利用)

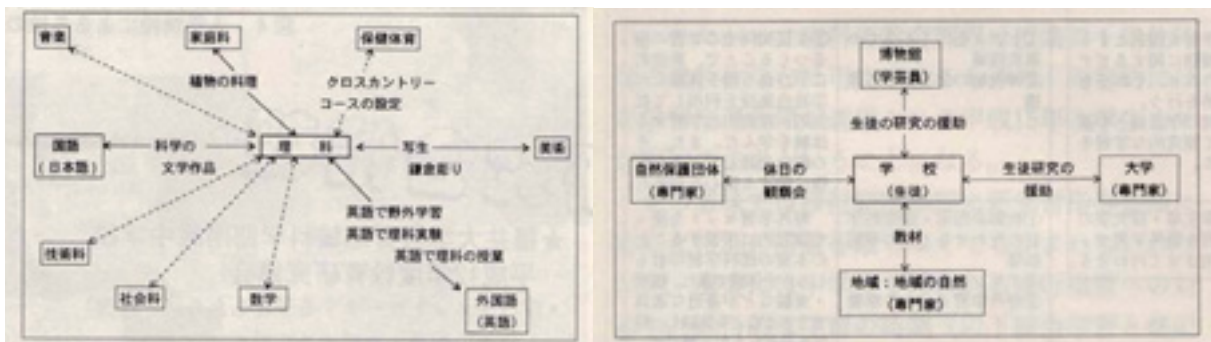
地域の自然を利用し他教科と関連した理科学習（図 1）

地域の自然を利用した野外学習では、学習内容が日常生活とも深く関連しているだけでなく、生徒

の興味関心が理科だけでなく他教科に広がる。生徒の興味関心や思考は教科別に行われるのではなく、総合的なものである。具体的には、野外学習中心のカリキュラムを実施する中で、生徒は、①地域の文化・歴史に関心を示す（社会）、②植物・動物を調査するだけでなく、それを料理して食べたりすることでより生物に関心を深める（家庭）、③身近な自然のスケッチや植物をモチーフにした鎌倉彫りのお盆の作り、そしてアースアートなどを行う（美術）、④科学読み物「野鳥」を読み実際に野鳥観察することで、文章を理解したり味わう能力を養う（国語）、⑤野外学習を英語で行うことで、生徒は身近な地域の自然という実際の文脈の中で英語を楽しんで使える（英語）などがあげられる。このように地域（の自然）を利用した野外活動は他教科と関連した学習に拡張していくのである。

学校を中心とした学びのネットワーク（図2）

地域の自然で野外学習を行うと、生徒は色々なものを発見する。生徒が興味を持って発見したことの中には教師がわからないことが沢山ある（ウラシマソウのつり竿の様にながいものは何のためにあるのかは、専門家でもわからない）。だから博物館の学芸員など専門家の助けが必要となる。生徒が発見したことを基に探究的な学習を展開させるためには、教師は生徒と共に博物館や大学などの社会施設・人材を利用した学びを体験することになり、学習指導を通して教師自らが学ぶ姿勢を示すことにもなる。また、そのような学習を続けていると教師と専門家とのネットワークが自然と構築され、生徒が専門家から学ぶ機会も増えてくる。具体的には、野外学習の後に、土曜日の放課後を利用して博物館や大学の専門家から動植物の同定をしてもらう。また、地域の自然に興味を深めた生徒を博物館や自然保護団体などの休日の観察会に参加させ、社会施設や地域を利用した学習を体験させるなどの活動を行った。このように野外学習を通して、学校と博物館など社会施設や地域の人材を利用した学習が展開され、学校を中心としたネットワークが構築された。



（図1）地域の自然を利用し他教科と関連した理科学習（図2）学校を中心とした学びのネットワーク

このように地域の自然を利用した野外学習は、他教科の教師との協力（クロスカリキュラム：教科間のネットワーク）や、学校外の専門家の協力（学校を中心とした学校外の施設・人材とのネットワーク）が必要になる。

（6） 学校と博物館・科学館など社会施設との連携：学びのネットワークの構築（Take から Give へ、そして Take と Give のバランス）

地域は生徒の日常生活の場であり、学校は地域の一部である。一人の教師の力には限界があり、生徒の可能性を最大限生かすことはできない。理科教育に限っても、教師が理科の全分野に精通しているわけではない。得意な分野もあれば不得意な分野もある。生徒の可能性を最大限生かすために、教師は社会のあらゆる可能性を利用して学習を構成すべきである。そのためには生徒の学習を支援する

システムとして、地域(日常生活の場)を利用した学びのネットワークを作る必要がある。博物館など地域社会の施設、地域の人材、大学・研究機関などを利用して、生徒の学習を構成することで、生徒の多様性に対応できる教育が保証されるのである。学校という閉じた空間で学習が終了することなく、学校を出発点として学習の場を社会に広げて行くような教育は、生涯学習時代に必要な教育方法と思う。教師は、知識を教えることだけでなく、生徒の学習を支援したり、生徒の学習を広げられるようなネットワークのコーディネーター的な役割を演じる必要がある。生涯学習時代においては教師も学習者であり、生徒と共に自分の世界を広げていく様な姿勢を示さなければならないだろう。生徒を指導したり、生徒と共に学び、自己改革を常に行い、それを楽しむことが大切である。教師が自分自身学び続けたり、生徒を指導する中で、生徒の日常生活の場である地域に、学校・博物館・社会施設・ボランティア団体などの学びのネットワークを構築することが今後望まれる。そのようなネットワークが構築されると、地域の特色ある教育が展開され、地域が学びの共同体に成長していく。現教育課程では博物館など社会施設を積極的に利用することを奨励しているので、今後それらを利用した学校教育が展開されるだろう。しかし、そう簡単に博物館などの社会施設をうまく利用した学習や教育が簡単に展開されるのではない。現在、博物館の利用について、「教師が生徒を博物館に連れて行き、丸投げ状態で学芸員に生徒を任せてしまう。」「博物館を利用した学習について、事前・事後の指導と博物館での学習のとの関連などの連携ができていないので、イベントで終わってしまう。」などの問題がすでに出ている。

私の場合、初めは私自身が知りたいことや生徒の発見したことを指導してもらうために、博物館を利用した。その内に、博物館の公開講座など地域のフィールドワークや博物館行事に参加して、地域の地層や動植物に関する知識を得たり、学校の授業とは異なる学習者主体の学びやその指導方法を学んでいった。その後、フィールドワークで学芸員を補助して一般の人に説明したり、博物館の公開講座の講師を務めたりして、今まで博物館から学ばせて頂いた(Take)お返しとして、博物館のために少し役立てることを行う(Give)ように変わっていった。博物館の専門家は(日本では人数が少ないので)、学校教育のためにそれほど時間を割けるわけではない。学芸員と教師の助け助けられ(Give and Take)のバランスよい関係がないと、今後、博物館と連携した教育はうまくいかないだろう。博物館から支援されることだけ考えるのではなく、博物館を支援することで何ができるのか考える事が教師に求められる。それが、健全な連携となると思う。

【博物館など社会施設などを利用した学習の成果】

これからは博物館など社会施設を利用した学習の成果について説明します。

(7) 受験教育ではなく文化作りの教育(受け身の教育から創造の教育へ)

5年以上フィールドワークをしていると地域の自然について標本や研究が蓄積されてくる。理科室が標本でミニ博物館のようになる。生徒や教師、地域の人と協力して地域を研究することでいろいろな副読本を作成できた。それは今思うと、まさに地域文化の創造であった。

理科室の博物館化と生徒の研究成果・作品の公民館での展示

地域の自然の調査を積み重ねると色々な標本や研究成果が学校に蓄積される。それを理科室に展示して、地域のミニ博物館にすると、生徒が理科室で学習するのを楽しみにするようになる。また定期的に、地域の公民館などを利用して地域の自然に関する展示会を企画し、学校での学習成果を地域に公開し学校と地域との交流を図る。コンピュータを利用すれば、学校のホームページで生徒の作品をインターネットで紹介することもできる。生徒が教科書の内容を学ぶだけでなく、地域の自然などに

ついて学び、そこで学んだことや研究したことを作品や研究資料として残しておく。5年で地域の自然に関する資料がたまり、10年で報告書などが蓄積される。教師は、それらの資料や研究を基に、地域独自のカリキュラムを作成できる。

地域の学習教材・教具の開発

地域の自然を利用した学習を10年間展開する中で次のような教材・教具を開発した。「三浦半島植物ガイド」(中1～中3用):三浦半島の植物観察に適したフィールドと季節の植物の紹介、「三浦の地層」(中3用):野外地層観察用ガイドブック、「Plants Encyclopedia on The Miura Peninsula」(中1～中3用):三浦半島の春の植物を中学生にわかる英語で解説した本、「Our Native Place Miura」(中3用):地域の自然や地理・歴史・社会について説明した英語の副読本、「日本の河川の実物岩石標本」(中3用)などである。これらの教材は、生徒と教師で作上げた地域文化遺産である。

現在は、地域の独自の特徴(アイデンティティ)をもった教育や地域の文化を創造し、そして発信し他地域や世界と簡単に交流できる時代である。テストのための知識やテクニックを教える受け身の教育から、地域の自然や文化を利用した地域独自の学校教育を創造していくことが、今求められている。

【今後の(理科)教育に対する提案】

これからは、今後の(理科)教育に対する提案について説明します。

(8) フィールドワーク(実物実体験)を中心に体系化する理科教育の理論「アースシステム教育」(クロスカリキュラム・総合的な学習を体系化できる理科教育、社会施設を利用した教育を奨励した理科教育の理論)

私は、「子どもが生き生きと理科を学習し、理科を好きになる教育」を目指して努力してきた結果、地域を教材化する総合的な教育にたどり着いた。私の実践を見て、故恩藤知典先生が、私の実践に近い理科教育の理念(理論)「アースシステム教育」を10年前紹介してくれた。アースシステム教育(Earth Systems Education)は、1991年にアメリカのオハイオ州立大学のVictor J. Mayer氏が中心になって開発した科学教育で、従来の物理・化学・生物・地学の分野別の科学教育ではなく、システム科学という総合的な科学の学問体系に基づいた新しい科学教育である。それは、「科学は基本的に地球のシステムについて研究することであり、地球について調べることを通して科学的な思考力を育成していく」という理念の理科教育であり、教師自らが生徒・学校・地域の実情に応じて教材・内容・カリキュラムを開発・構成する方法を提供している。生徒が地域の自然(身近なアースシステム)で野外学習を行って課題を発見し、その課題をグループで協力して探究する学習を展開し、その課題に関する資料や情報をインターネットで世界から収集したり、コンピュータを利用した学習などを奨励している。アースシステム教育は、直接体験(実物実体験)を重視した理科カリキュラムを開発する時や、地域の自然を教材化するための理科教育の理念を構築する上で参考となる一つ理科教育である。詳しい情報は<http://www.nier.go.jp/masakazu/Myweb/index.htm>で見ることができる。

(9) 子どもが生き生きと主体的に学習する教育システムの開発(カリキュラム・指導法・教材教具・評価方法・教師教育プログラムの開発など):拡張的・有機的な学習とそれを指導できる教師教育

私が、教師として目標とし実践してきた教育は、理科から他教科へと関連していき、学校の枠を超えて学校外の社会施設・人材を利用していく、そして、地域から始まり地球規模に広がって行く(Act locally and think globally)というものであった。それは、まとめると、拡張的に広がり、その広が

りを有機的に関連づけるような学習（拡張的・有機的な学習：Expansive and Organic Learning）を展開する教育であった。その学習は、アースシステム教育で行われるシステム的な見方・考え方を養う学習とすごく似ている。今後、基礎・基本をしっかりと教え込み、拡張的・有機的な学習や総合的な学習を指導できる教師が日本で求められる。そのような教師は、まさしく新教育課程で求めている「生きる力」を育成できるであろう。現在、「生徒が生き生きと意欲的に学習する教育システム」の研究、「その教師教育」の研究、そして「アースシステム教育」の研究を一緒に進めている。

（10）教師自らが学ぶ楽しさを後ろ姿で見せる（人生は楽しいもの、一生学び成長する（生涯学習：人生一書生））（初任時の教師と定年時の教師の力量：教師教育の大切さ）

教師自身が学んでいるから、知識を教えるだけでなく、知恵や学ぶ意味・楽しさ・厳しさなど示すことができる。生徒は、教師に受験テクニックだけを望んでいるのではなく、教師の「生き様・後ろ姿」から影響を受けるのである。わずか大学4年間の教員養成課程や専門課程で学んだ知識や技能ですばらしい指導をすることはできない。もし教師が知識や受験テクニックを教えることだけが教育で求められるならば、熱心な教師はすぐによい教師になれるであろう。しかし、そうではないだろう。教師自身が、10年後、20年後、そして定年のときまでに、自分の能力を段階的に向上していくような教師像が必要である。教師自身が生涯にわたって学ぶことを楽しむ姿が一番大切である。生徒とともに学び、成長する姿勢のある教師が望まれている。地域の自然の探究は、一生かかっても探究し尽くせるものではない。私は、できる限り生徒と共に地域の自然を歩き、共に発見を喜び、不思議に思ったことを共に楽しんで探究することを心がけてきた。

私が求める理想の理科の教師像は宮沢賢治や寺田寅彦である。彼らは、まさに総合的な科学者であり、科学を学びながら科学だけにと止まらず、学ぶことを通して人生を楽しんでいた。宮沢賢治は、理科に止まらず、文学・美術・農学・宗教など様々な分野を理科と融合して生活を楽しんでいた。それは、日常生活と関わりのある学びを構成していくと自然と総合的な学びになって行く例としてあげられる。寺田寅彦も物理学を日常生活と結びつけ、地球の大気や気象現象を茶の湯の話と関連づけたりしていた。彼らは科学を通して自分の人生を豊かに作り上げていった例として最適である。彼らと同じになることはできないかもしれないが、同じようなセンスを持った教師を育てることは可能であると思う。また、私自身、彼らのようなセンスで科学を学ぶことや人生を楽しめたらと考える。学ぶ楽しさを生徒に味わせるには、日常生活と関連があり、教科横断的で総合的な理科教育が必要であり、それは全人教育であると思う。

（11）地域に根ざした教育（学習）の創造：地域学「みうら学」

日本は、2007年に新しい教育課程の作成に向けて、中央教育審議会・初等中等研究分科会・教育課程部会から「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（答申）が出されました。その中で、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」の育成の重要性が再確認され、日本の教育に、総合的な学習の時間が整理されて残されました。各学校は、地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を充実してゆくことが期待されています。それには、子どもの育った地域に根差した教育

を展開し体系化する必要があります。

アースシステム教育（Earth Systems Education）は、システム科学概念に基づいて、教師自らが児童・生徒、学校、地域の実情に応じて教材、内容、カリキュラムを開発する方法を提供する教育です。アースシステム教育は、身近な自然や地域社会を利用して子どもが主体的に探究的な学習をすることを奨励しています。それは、日本や世界で求められている（理科）教育や総合的な学習を実施する上で一つの具体的な方法を示してくれます。

三浦市は、自然が豊かで風光明媚な地域です。この度、アースシステム教育を利用して、三浦の自然環境や社会環境を生かした総合的な学習のために教材開発を行うために三浦市教育研究所の主催で「みうら学」研究の始まり、その成果としていろいろな単元の教材が開発され、授業案も提案され、素晴らしい実践も行われました。

今後「みうら学」の研究によって、子どもが生活する三浦市の自然、文化、社会、歴史などの多様な教材が開発されるでしょう。それらを利用した教育が行われることで、学校で学んだことと生活や自然・社会との関連が理解でき、学ぶ意味が分かり、学習意欲が高めるだけでなく、郷土愛を育み、自分の育った郷土に誇りをもつような子どもが育つことと願っています。彼らが郷土を保全するだけでなく、よりよい郷土を創造することに積極的に参加するような能力・態度を育むような教育が三浦市の小中学校で展開されることを期待しております。